様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １４ 日現在

機関番号：３２６３４
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ１６６０３

研究課題名（和文）形態学としてのウィトゲンシュタイン哲学の解明

研究課題名（英文）an elucidation of Wittgenstein's philosophy as a morphology

研究代表者
古田　徹也（Furuta, Tetsuya）

専修大学・文学部・准教授

研究者番号：００７１０３９４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、三カ年で以下の（１）～（４）の各個別研究を完成と統合とを行い、形態学としてのウィトゲンシュタイン哲学の意味と意義を明らかにする研究を遂行した。
（１）ウィトゲンシュタインのアスペクト論と言語論の内実を、言葉の形態（Gestalt）という観点から総合的に解明する。（２）ゲーテからウィトゲンシュタインへの影響関係を精査し、ゲーテ的形態学とウィトゲンシュタイン的形態学の共通性と差異をともに示す。（３）カール・クラウスの言語論の内実を、ウィトゲンシュタインの言語論を参照しつつ解明する。（４）カール・クラウスからウィトゲンシュタインへの影響関係と、両者の共通性を示す。

研究成果の概要（英文）：I have done the following individualized studies and then integrated them during the study period:
(1) An elucidation of the contents of Wittgenstein's aspect-theory and his linguistic theory from the viewpoint of "Wortgestalt"; (2) A presentation of the commonality and the difference between Wittgenstein's morphology and Goethe's morphology, examining the influence from Goethe to Wittgenstein; (3) An elucidation of the contents of Karl Kraus' linguistic theory by referring to Wittgenstein' s linguistic theory; (4) A presentation of the influence from Kraus to Wittgenstein, and of the commonality between their linguistic theories.

研究分野：現代哲学・倫理学

キーワード：ウィトゲンシュタイン　ゲーテ　カール・クラウス　形態学　言語批判　世紀末ウィーン

１．研究開始当初の背景

ルートウィヒ・ウィトゲンシュタイン（1889～1951）は、現代の哲学を代表する人物の一人だが、「純粋に抽象的な問題を扱う英米圏の言語哲学者・論理学者」というイメージが流布している。しかし、この捉え方は極めて偏ったものであり、それより遥かに多面的な文脈の下に置かなければ、彼の議論の中身やその意義を十分に理解することはできない。

研究代表者はこれまで、ウィトゲンシュタインの言語哲学、心の哲学、行為論を探究すると同時に、彼の哲学の大きな背景を形成する世紀末ウィーンの思想的状況、さらにはそれ以前の哲学・思想から彼への影響関係についても研究を進めてきた。とりわけ、ウィトゲンシュタインが、物や言葉がそれとして輪郭づけられる有り様を「共通の本質の存在」ではなく「多様な見方への開け」を通して説明するという、非常に特異な議論を展開している点に着目してきた。

その過程で、ウィトゲンシュタインの哲学の全体像は、カール・クラウスを代表格とする世紀末ウィーンにおける言語論、そして、ゲーテの学問的方法論との比較対象の下ではじめて、明晰なかたちで浮かび上がらせることができると考え、本研究を着想するに至った。

２．研究の目的

ウィトゲンシュタインの哲学は、現在、「分析哲学の源流」と「ドイツ・オーストリア文化の思想の後継」という二つの像に引き裂かれた仕方で理解され、特に前者の側面に傾斜した理解が主流となっている。本研究は、「Gestalt（かたち、形態）」という概念を鍵にして、彼の哲学に対する統一的な像を提示することを目指したものである。具体的には、ゲーテの学問的方法論とウィトゲンシュタインのそれとの比較、そして、カール・クラウスの言語論とウィトゲンシュタインのそれとの比較を通して、一種の形態学としてウィトゲンシュタイン哲学の全体像を浮かび上がらせることを試みた。

３．研究の方法

ゲーテとウィトゲンシュタインの学問的方法論の比較、および、クラウスとウィトゲンシュタインの言語論の比較のいずれに関しても、先行研究の綿密な調査と、それに基づく批判的検討という方法をとった。具体的には、主に以下の文献の読解を行った。

・【ゲーテとウィトゲンシュタインの学問的方法論の比較】Baker, G.P. and Hacker, P.M.S. (1980): *Wittgenstein: Meaning and Understanding*, Basil Blackwell., Haller, Rudolf (1988): *Questions on Wittgenstein*, University of Nebraska Press.Rowe, M.W. (2004): “Goethe and Wittgenstein” in his Philosophy and Literature, Ashgate, pp.1-21., Schulte, Joachim (1990): „Chor und Gesetz: Zur ≫Morphologischen Methode≪“ in ders. Chor und Gesetz: Wittgenstein im Kontext, Suhrkamp., Krkac, Kristijan (2013): *A Custodian of Grammar*, University Press of Amer.

・【クラウスとウィトゲンシュタインの言語論の比較】Bouveresse, Jacques (2006), “≪Apprendre à voir des abîmes là où sont des lieux communs ≫ : le satiriste & la pédagogie de la nation” in Agone, NÂ° 35/36: Les guerres de Karl Kraus, pp.107-131., Malcolm, Norman (1984): *Ludwig Wittgenstein: A Memoir*, 2nd edition, Clarendon Press., Toulmin, Stephen and Janik, Allan (1973), Wittgenstein's Vienna, Simon and Schuster., Janik, Allan (2001): *Wittgenstein's Vienna Revisited*, Transaction.

また、ウィトゲンシュタイン自身の膨大な遺稿群に関しても、それらの内容を調査し直し、解釈と翻訳を通じて本研究の進展を図った。とりわけ、晩年の遺稿集 *Last Writings on the Philosophy of Psychology*, Vol.I, edited by G.H. von Wright and H. Nyman, Basil Blackwell, 1982.および、*Last Writings on the Philosophy of Psychology*, Vol.II, The Inner and the Outer, edited by G.H. von Wright and H. Nyman, Blackwell, 1992.、それから、後期の講義録のひとつである *Wittgenstein’s Lectures on the Foundations of Mathematics*, Cambridge 1939, edited by C. Diamond, The University of Chicago Press, 1986.に関しては、訳稿の作成も行いながら精緻な読解を目指し、その成果の多くを研究に取り入れた。

４．研究成果

まず、ゲーテとウィトゲンシュタインの比較研究に関しては、ウィトゲンシュタインがゲーテの形態学の中身とその意義を深く理解し、一面ではその方法論を受け入れていることを明確にした。また、同時に、ウィトゲンシュタインが他面ではゲーテの本質主義的な側面やスタティックな枠組みを拒否して、私たちの言語的活動の複雑性やダイナミズムを捉えようと試みている点を明らかにした。なお、以上の研究成果は、図書『これからのウィトゲンシュタイン』および同書所収の論文「形態学としてのウィトゲンシュタイン哲学」として広く一般に公開したほか、2016 年 12 月 17-18 日の二日間にわたって、「これからのウィトゲンシュタイン――刷新と応用」と題するシンポジウムを慶應義塾大学日吉キャンパスにて開催し、多くの登壇者・参加者と広く研究交流を行った。

次に、ウィトゲンシュタインとカール・クラウスの言語論の比較研究に関しては、両者

がともに「言葉の立体的理解」とも呼ぶべき現象に着目し、言葉が「かたちを成す」契機に高い重要性を見出していることを確認することで、両者の言語論の本質的な共通性を提示した。なお、以上の研究成果は、単著『言葉の魂の哲学』の一部として広く一般に公開した。

そのうえで、本研究では、以上の個別研究を統合する作業を通じて、形態学としてのウィトゲンシュタイン哲学の全体像を解明し、あわせてその方法論を、現実の具体的な諸問題に応用する端緒を開いた。

ウィトゲンシュタインは自らの形態学について、人々をいわば「精神的痙攣」から解き放つ役割があると強調している。その啓蒙的な役割の要点は、人々の言語使用が硬直化して不自由に陥っていることを指摘し、言葉が本来もつ柔軟かつ創造的な可能性を提示してみせることにある。そうした彼の議論を通して、「言葉を使うことによって思考し、行為し、生活する」という、人間の有り様にとって根本的な特徴となるものを捉え直し、われわれの言語的活動自体をより豊かなものに発展させる手掛かりが得られることを、本研究は明らかにした。そして、その成果は、単著『言葉の魂の哲学』の結論部に組み込み、広く一般に公開した。

ウィトゲンシュタインはクラウスとともに、言葉がかたちを成す契機（われわれが言葉を立体的に理解する契機）に着目しつつ、言葉の豊穣な可能性を探る言語批判を展開している。すなわち、現実の生活の流れのなかで用いられる個々の言葉に注意を払い、吟味し、それらを相互的な連関の下で多面的に理解する実践である。その実践のなかで、言葉の見方がひとつに縛られているときに当の見方を相対化する別の見方に気づくこと。また、その気づきをきっかけに、言葉が用いられる現場を自由に見て回り、様々に異なる用法を自由に記述すること。そして、その営為を通じて、言葉が織り込まれている自分の生活や他人の生活について十全な理解を得ること。以上の事柄の根本的な重要性を、ウィトゲンシュタインが自身の哲学的活動を通じて示していることを、本研究は明らかにした。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

①古田徹也、「現代の英米圏の倫理学における運の問題」、査読無し、『社会と倫理』第32号、南山大学社会倫理研究所、3-14頁、2017年11月。

②古田徹也、「共同行為の問題圏」、査読無し、『現代思想』2017 年 12 月臨時増刊号（vol.45-21）、青土社、222-234 頁、2017年11月。

③古田徹也、「半透明な心――他者とともにあることの悲劇、あるいは救いをめぐって」、査読無し、『at プラス』31号、20-33頁、太田出版、2017年。

④古田徹也、「文化に入り行く哲学――デイヴィドソンの言語哲学の限界をめぐって」、査読無し、『フィルカル』Vol.1 No.1、112-140頁、ミュー、2016年。

〔学会発表〕（計３件）

①古田徹也、「共同行為論の射程――分析系の議論を中心に」、日本現象学会2017年度年度研究大会（第39回）・シンポジウム「共同行為の現象学――現象学と現代行為論の接点を探る」、大阪大学、2017 年 11 月11日。

②古田徹也、「現代の英米圏の倫理学における運の問題」、日本倫理学会第67回大会・主題別討議「倫理学における運の役割」、早稲田大学、2016年10月1日。

③古田徹也、「言葉を解放する哲学――ゲーテとウィトゲンシュタインの学問的方法論の比較から」、科学研究費補助金基盤研究（C）「「単元を貫く言語活動」を支える言語観と授業づくりに関する研究」主催・公開研究会、立教大学池袋キャンパス、2016年7月31日。

〔図書〕（計５件）

①古田徹也著『言葉の魂の哲学』、講談社、2018年、全249頁。

②荒畑靖宏・山田圭一・古田徹也(編著)、入江俊夫ほか著『これからのウィトゲンシュタイン――刷新と応用のための14篇』、リベルタス出版、2016年12月、全269頁。序論（9-16頁）および、第8論文「形態学としてのウィトゲンシュタイン哲学――ゲーテとの比較において」（135-152頁）の執筆を担当。

③勢力尚雅・古田徹也著『経験論から言語哲学へ」、放送大学教育振興会、2016 年、全285頁。第8-14章（152-258頁）、第15章後半（271-275頁）の執筆を担当。

④ウィトゲンシュタイン著『ラスト・ライティングス』、古田徹也訳、講談社、2016年、全514頁。

⑤コーラ・ダイアモンド編『ウィトゲンシュタインの講義 数学の基礎篇――ケンブリッジ 1939年』、大谷弘・古田徹也訳、講談社学術文庫、2015年、全624頁。

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

〔その他〕

・荒畑靖宏・山田圭一・古田徹也（主催・司会）「シンポジウム　これからのウィトゲ

ンシュタイン――刷新と応用」、慶應義塾大学日吉キャンパス、2016 年 12 月 17-18 日。

・ホームページ
https://sites.google.com/site/frt8050

６．研究組織
(1)研究代表者
古田　徹也（FURUTA, Tetsuya）
専修大学・文学部・准教授
研究者番号：00710394

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし

(4)研究協力者
荒畑　靖宏（ARAHATA, Yasuhiro）
山田　圭一（YAMADA, Keiichi）